

令和 元年 6 月 22 日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02820

研究課題名(和文)ベトナム難民2世の社会統合に関する研究

研究課題名(英文)Study on the social integration of second-generation Vietnamese refugees

研究代表者

河先 俊子(Kawasaki, Toshiko)

国土館大学・21世紀アジア学部・教授

研究者番号：60386927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はベトナム難民第2世代の経験から社会統合の様相を考察することを目的として、インタビュー調査と定時制高校における参与観察を行った。調査協力者は、異言語・異文化を持つことが肯定的に評価される場において十全に活躍する一方で、ベトナムにルーツを持つことに対する否定的な評価や偏見に抵抗しつつ、自己定義を行っていた。また、定時制高校では、移民の背景を持つ生徒に対して、一緒にやるという姿勢で手助けをする、否定的な評価をせず、積極的に褒めたり認めたりするといった対応がなされていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、日本ではあまり研究の対象となっていない成人後の移民第2世代に焦点をあて、彼らの日本人・日本社会との関わりや自己認識の一端を明らかにしたという点である。研究の結果から、移民の社会統合において、教育達成のために十分な支援を提供することの重要性と、異言語・異文化を持つことを否定的に評価する風潮を解消する必要性が示唆された。また、本研究を通して、多文化共生教育をめざすNPO法人との協力関係も構築され、今後協働で支援や研究を行う道を開くことができた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to investigate the social integration of immigrants to Japan based on experiences of second-generation Vietnamese refugees by conducting interviews with them and fieldwork in night high school. The interviewees are fully active and express their ability in places where their culture and language are appreciated; they are resisting the depreciation of and prejudice against Vietnamese and creating their own self-definition. In the night high school, teachers and officially delegated coordinators supply sufficient scaffoldings to immigrant students to accomplish tasks and willingly praise and approve them without giving negative evaluations.

研究分野：日本語教育学

キーワード：ベトナム難民第2世代 社会統合 境界文化 定時制高校 移民第2世代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

労働力不足を背景として、外国人住民が増加し続けている現在、異言語・異文化の人々の社会統合は、日本社会における喫緊の課題となっている。日本に先立って、移民を受け入れ、多文化社会となっている欧米諸国では、統合のメルクマールとして移民第2世代の教育達成、就労状態、世帯収入、差別経験などに関する大規模調査が実施されており、統合に影響を与える要因の究明も進んでいる。日本においても、移民第2世代にあたるニューカマーの子どもたちの学校への適応や進路選択に関する研究が行われており、日本の「学校文化」の問題が指摘されると同時に、親世代の文化資本やハビトゥス、エスニック・コミュニティといった社会関係資本などの影響が明らかにされている。また、ニューカマーの子どもたちの言語能力、アイデンティティに注目した研究も多い。しかし、学校生活を乗り切った成人となった後のニューカマーの子どもたちを対象とした研究はまだ少なく、彼らの社会統合に関する考察は十分ではない。そこで、移民の社会統合の現状を知る手がかりを得るために、社会人となった元ニューカマーの子どもたちが日本社会でどのように活躍し、自己をどのように認識しているか調査するという着想を得た。

一方、移民第2世代が日本人と対等な関係を築くことは、社会統合のための必須条件であると考えられる。対等な関係は様々な社会制度を通して保証され、実現されるものであるが、個人対個人のミクロな関係構築では言葉が重要な役割を果たす。したがって、日本語は、両者が対等な関係を築くように使われる必要がある。しかし、日本語教育学の分野では、多文化共生社会の実現をめざして計画された日本人と外国人の対話活動において、日本語によって不平等な関係が再生産されているという報告が多い。それでは、学校や職場など日本人と外国人が日常的に接する場ではどうなのであろうか。現に移民第2世代が活躍している場で、日本語がどのように使われているか明らかにすることによって、社会統合の実現に資するミクロレベルでの人間関係構築のための日本語の使い方に関して、示唆が得られると考えられる。そこで、移民第2世代が活躍する場における日本語の機能を調査するという課題を設定した。

2. 研究の目的

本研究では、出身社会の状況や文化的規範などの影響をある程度統一するために移民第2世代のうちベトナム難民の第2世代を対象とし、彼らの経験から社会統合の様相を考察することを目的として以下の2つの課題を設定した。

- (1) ベトナム難民第2世代が成人後、学校生活を含むこれまでの経験をどのように意味づけ、日本社会の中で自己をどのように位置づけているのか。彼らの自己認識にはどのような要素が影響を及ぼしているのか。
- (2) 移民第2世代が活躍する場において、日本語は人間関係構築のためにどのように使われているのか。

なお、移民研究では、移住した年齢によって、1.25世代、1.5世代などと分類されることがあるが、本研究では日本生まれないしは親の呼び寄せで来日し、日本で義務教育を受けた者を第2世代と呼ぶことにする。

3. 研究の方法

研究課題(1)に関しては、ベトナム難民第2世代を対象としてインタビュー調査を行った。インタビューでは来日の経緯や家族関係、日本の学校や職場での経験を語ってもらったほか、ベトナム人、日本人というカテゴリー化に対する意見を述べてもらった。所要時間は1時間から1時間半程度である。そして、そこに現れる自己認識を「境界文化」という概念を用いて分析し、考察した。「境界文化」とは、近代の国民国家システムに埋め込まれた人々の存在ではなく、境界によって作り出された統合化と差異化の過程を生きる人々の実践文化であり、移民第2世代の生活世界を理解するのに有効な概念であると考えられる。

研究課題(2)に関しては、移民第2世代が活躍する場として定時制高校の多文化共生部で参与観察を行い、録画データを収集し、日本語がどのように使われているのかという観点から分析した。また、移民第2世代が働く職場で聞き取り調査を行った。考察を進めるにあたって、研究課題(1)で行ったインタビュー・データのうち職場での経験について語られた部分も参考にした。

4. 研究成果

研究課題(1)では、ベトナム難民第2世代8名と中国人移民第2世代2名のデータを収集した。当初はベトナム難民第2世代のみを対象として協力者を募っていたが、協力者を増やすことが難しかったため、最終年度は中国人移民第2世代も対象に含めた。

収集したデータは、「境界文化」という概念を用いて、主として「どのように差異化を経験しているか、差異化に関わる要因は何か、どのように統合化を経験しているか、統合化に関わる要因は何か、差異化と統合化の狭間で、自己はどのように位置づけられているか」という3つの観点から分析した。以下、順番に結果と考察を記す。

まず、差異化に関しては、「(空港で)外国人のゲートの方に入らなくちゃいけないよ」「一部の人間からは(.)まあ、ちょっとこう、ベトナム人やって、小馬鹿にされたりすることはありましたけど」「(アルバイトに応募して)名前言った瞬間に、あ、けっこうですって言われて、

ガチャンって。一箇所じゃないんですよ、何箇所も。」一軒家に住んでいるが名前から外国人だとわかると、ゴミ出しのルールを守らない人、うるさい人がいた時に真っ先に疑われるといった語りに現れているように、出入国管理、学校や職場での外国人としてのカテゴリー化、周囲の日本人による差別、家庭と学校社会との断絶によって差異化を経験していた。こういった差異化は、日本文化資本が不足していることに対する不安や疎外感、否定的な自己認識の形成をもたらしていた。また、「(二つの文化)両方とも中途半端」という否定的な自己評価がなされる際には、歴史や年中行事に関する知識=文化という固定的な文化概念の影響が見られた。その一方で、こうした差異化に対しては「納得がいかない」「普通に扱って欲しい」といった抵抗の声も強かった。山本(2002)がロンドンの中国系第2世代について指摘し、川上(2016)が「名のりの政治性」として指摘したように、マジョリティによって押しつけられた枠と自己との間に葛藤が生じていると考えられる。

差異化に対する不満の裏づけとして、「日本人のように育っている」「私のこの気持ちを全部伝えるには日本語で伝えたい」という語りに見られるように日本語、日本的な行動様式を身につけ、現在のベトナムを「外国」のように感じ、「日本人として生きていきたい」と思うような強い統合化があると考えられる。特に日本生まれでないしは10代前半以前に来日した場合、統合化の意識が強く、積極的に帰化という手段を選択していた。

また、人という枠組みを拒否したり、「ベトナム系日本人」というカテゴリーを創設したり、「ベトナム語と日本語が自分の強み」と考えそれを生かすことのできる職場を選択するなど、ベトナム語を自己の価値として積極的に表出させ、既存の言説を乗り越えようとする兆しも見られた。特にベトナム語能力が高い場合、この傾向が強く見られた。

今回の調査協力者は、全員高卒以上の学歴を持ち、「獲得的資本」に基づいて親とは異なる職業選択をして社会的地位を上昇させていた。この点、OECDの社会統合の指標のうち、労働市場への参加、雇用の質、成人の認知的スキルおよび職業訓練(学業成績を含む)の領域では統合が達成されているケースとみなすことができる。この要因としては本人の努力はもちろん、向学校的な親の教育方針や既存のベトナム人コミュニティによる援助のほか、学校における特別な支援および地域の日本語教室における支援を挙げることができる。このような支援を受けたことのある協力者からは、感謝の言葉が述べられていた。また、日本とベトナムの経済的な関係が緊密化し、ベトナムと取引関係を持つ企業があること、ベトナム人観光客、技能実習生、留学生の増加によって訪日、在日ベトナム人を対象としたビジネスが拡大していることは、特にベトナム語能力が高い第2世代の労働市場における価値を高め、有能感をもたらしていると考えられる。このようなマクロな国際関係の変化も社会統合を進める要因として作用していると思われる。

その一方で、制度上のあるいは日本社会で日常的に実践されている差異化は、社会統合を妨げていると考えられる。

研究課題(2)について、定時制高校の多文化共生部では、日本人教員およびコーディネーター(NPO法人と教育委員会との協働事業として支援の円滑化のために派遣されている)の生徒に対する対応や働きかけには次のような特徴が見られた。()内は具体例。

否定的な評価をしない(ぞんざいな言葉づかい、「ハゲ」「ババア」などの呼びかけもそのまま受け入れる)

くり返しや言い換えによって生徒の発話をいったん受け止める(生徒:(先生が提案した仕事に対して)やだ。ベネフィットがない。コーディネーター:ベネフィットがいっぱいあるところがいいんだ。)

生徒の意思を尊重する(生徒が指示に従わなくとも強制せず、自分から取り掛かるまで待つ)

積極的な褒めや評価(友だちの送別会で一人ずつメッセージを言わせたが、パスした生徒に対して、来てくれてありがとうと参加自体を評価する)

一緒にやるという態度で個々に対し適切な足場かけをする(文化祭の来場者へのメッセージを書きたがらない生徒に対し、高校で何が楽しかったかなど質問をして答えを書きとる)

現実離れた考えや教師が賛成できない考えが示された場合には婉曲的に再考を促す(フランス軍の傭兵になるという生徒に「戦場に行くような危険な仕事はしてほしくない」と話す)

日本語能力をはじめ生徒の能力が問題化されない(誰でも参加できる活動を用意する)

多文化共生部では、書き初め、七夕、クリスマスといった日本の年中行事の実施のほか、ルーツのある国を紹介する掲示物の作成、出身国の言語を教えるなど生徒のルーツを強調する活動もさせている。生徒をマジョリティの側から見たエスニックなカテゴリーに閉じ込めているきらいはあるが、エスニシティは価値のある資源として位置づけられている。また、先に述べたように教師の指示に従うことを強制せず、やるかやらないかは最終的に生徒の自由意思に任されている。生徒の能力が問題化され、「指導」が行われることはない。生徒にとっては、自分が歓迎され、全面的に受け入れられる場となっているように思われる。

一方、聞き取り調査を行った移民第2世代が働く職場では、日本人社員によって日本語能力は問題化されることなく、外国人社員は会社にとって必要な存在として将来を期待されていた。移民第2世代に対するインタビューでは、外国籍ないしは海外経験のある従業員の存在、ベトナム語能力が評価されることが働きやすい環境の特徴として指摘され、日越間の調整役として

苦労しながらも、困っているベトナム人を助けて感謝されることにやりがいを感じているケースもあった。日本語・日本国籍など日本的な部分の不足が問題化されず、2つの言語・文化にまたがる経験が正統な資源として認められることがこのような職場の特徴として指摘できる。

本研究は、日本ではまだ研究の対象となっていない成人後の移民第2世代に焦点をあて、彼らの日本人・日本社会との関わりや自己認識の一端を明らかにしたという点に社会的意義があると考えられる。移民第2世代が高い教育達成に成功し、獲得的資本に基づいて社会的地位を上昇させる上で、学校や地域の日本語教室、教会などからの支援が重大な役割を担っていることが確認できた。特に定時制高校の多文化共生部のように、否定されることなく全面的に受け入れてもらえる場合は、不安を抱えている生徒にとって自信回復の場となっているように思われる。移民の社会統合を進める上で、学校から就職までの支援制度の整備の重要性が再確認できたと言えよう。一方、マジョリティの側が日常的に行っている差異化、つまり移民の背景を持つことや日本的なものの不足を問題化し、低い評価を与えることは、移民第2世代の葛藤を生み出していることも確認できた。社会統合を進めるためには、マジョリティ側の変容を促すような教育や制度の整備も必要である。

今後は、移民の社会統合を促すためにどのような支援や働きかけが必要かという点を追求していきたいと考えている。本研究を通して、多文化共生教育を進めているNPO法人や高校教員、高校に派遣されているコーディネーターとの協力関係を作ることができたため、コーディネーターが多文化共生教育を実現させるプロセスを明らかにする研究を行う予定である。また、移民と日本人との個人間の対等な関係を築くような日本語の使い方については、データ収集が不十分なこともあり、究明できなかった。これも今後の課題としたい。

<参考文献>

- 川上郁雄(編)『「移動する子ども」という記憶と力—言葉とアイデンティティ』くろしお出版、2013年
山本須美子『文化境界とアイデンティティ—ロンドンの中国系第2世代』九州大学出版会、2002年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

河先俊子、大衆文化が日本人と韓国人との関係構築に及ぼす影響、インターカルチュラル、査読有、16号、2018、145-158

〔学会発表〕(計1件)

河先俊子、ベトナム難民第2世代のライフストーリー、異文化間教育学会、2018年

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。